



號六十四第 月七年六十和昭 行發日十 行發日十・回一月毎 錢五金部一價定誌本 錢拾六金(共稅)年一 一才 田杉 一ノ七西座鎮區橋京市京東 社信通盟同 所行發

同盟青年の自覺に徹せよ

團長 古野伊之助

三百若人待望の本社同盟青年團は去る二十二日本社に於て結團式を舉行したことは別項の如くであるが左は當日の古野團長の訓示要旨である。

我等の任務

今日諸君と共に同盟青年團の結團式を開くに當つて私の申し度いことは只「同盟青年の自覺に徹せよ」の一言に盡きる。然らば同盟は一體何を自當に如何なる心構へで何を爲さんとするのであるかといふことにつき一應の説明をする必要があると思ふ。職員に諸君には屢々繰返し是等の點につき説明をする機もあつたのであるが、青少年諸君と親しく語る機會は得られなかつたので本日繰返しお話しする次第である。一體今日は日曜日である。而も朝早くからどうして社の諸君がかくも揃つて玆に集つたのか。これは多分豫め今日何時に此處で青年團の結團式を行ふと云ふ報道が諸君の耳に入つてゐたのであると思ふ。意識するとせざるに拘らず毎日人間の生活は凡て或る事實に關する報道を基礎に規律されてゐる。又獨り各個人のみでなく國自體の動向も事實の報道、即ちニュー

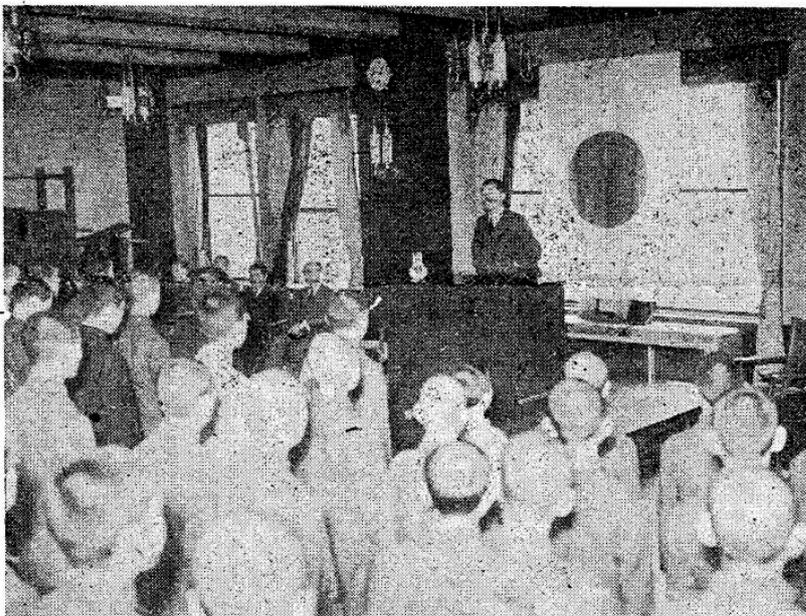
イスによつて動いて行く。

ドイツとソ聯はどう云ふ關係に立つてあらうか、汪主席が東京に來た、何を爲すかと云ふことは一緒に誰も見ても譯ではないが、さうした事實に關する報道によつて、即ちニュースによつて國民全體は自分の國の動きを知り、又自分自身の日常の生活を規律してゐる。このニュース、この事實に關する報道、これを取扱ふのが同盟の任務である。この報道の任務を通じて國家に御奉公する報道報國の目的を以て同盟通信社が立つてゐるのである。而もこの同盟は全日本を代表して日本の實情を世界各國に傳へると同時に世界各國の動向を一億國民に傳へる重大な任務を荷つてゐる。同盟がもし誤つた報道をすればひとり一億國民を誤らせるのみならず、又日本に對する實情を世界各國をして誤認させる。又これは單に對外的な關係のみでなく、日本全國津々浦々に起つてゐる日常の事件をどうして全國各地方の民衆に傳へるか云ふことを考へて見ると同盟の役割の如何に重大なるかは自ら明かである。この同盟の目的が報道報國にあると云ふことをはつきり認識し得

れば自ら何を爲さねばならぬかと云ふ心構へも自然明白になる。

同盟の役割

諸君も報道報國、正確迅速、大同結盟の文字を何度も見られたであらう。同盟の目的は報道報國に



ある。其の任務は正確迅速である。その精神は大同結盟にある。その意識するとせざるに拘らず同盟を通じて全國各地方に又全世界に傳へられる報道によつて國が

動いてゐるのである。世界の各國は日本を眺めてゐるのである。と云ふことを考へた時に我々が共に働いてゐる同盟が如何に偉大な如何に重要な使命を日々遂行してゐるか云ふことを齊しく考へられるであらう。従つてこの報道の任務を遂行するに當つて正確且つ迅速でなければならぬことは云ふまでもない。而して他方任務に携はる三千の大小社員は三千人一心となつて所謂大同結盟の精神に燃えて其の職場々々は異らうとも年齢の相違のあるにしても正に一九となつて

私の三十年前

今日時局益々重大、同盟の任務も亦其重大さを加へつゝある。この世界情勢の變化につれて日本がどう動き日本が何を考へてゐるか云ふことを全世界各國に徹底する一方この變轉極りなき秋に當つて一億國民を眞に一丸としてこの總ゆる内外の危局を突破する、この體制を固めて行く力はまた同盟が荷つてゐるのである。諸君はこの同盟の青年であり、十年、二十年先にはこの同盟そのもの運命を双肩に荷つて立つのだと云ふ事を自覺して貰ひ度い。私は今同盟の責任者として諸君に呼びかけてゐるのであるが、諸君の顔を見ながら三十年の昔を振り返つて見ると丁度諸君と同じ道を歩んで來たことを想ひ出す。或時、大切な書類を先輩から運んで行く様にと頼まれた。其書類を持って飛び出したところが生憎雨が降つて居る。無論傘を買ふ金もなかつた。と云つて其儘抱へて行つたのでは其書類を濡らしてし

まう。突嗟の場合、懷の中に押込んで驅け出した。かくして書類は濡らすこと無く渡したが、歸路にはズブ濡れになつてしまつた。その濡れた着物を絞つて、其のまゝ着て仕事を續けた事を思ひ出す。又或時はある新聞社に大事な書類を確に届けて來たのに、どうした事が書類が何かの間違ひで届いて居ない。呼び出されて、こつぱどく叱られた。私は慥かに届けたに相違ないと思つてゐるのだが、併し受取を取つてゐる譯でもない。只濟みませんと云ふより仕方がない。その新聞社で確めて見たが無い、結局謝まつて來たと云ふ様なことを數々呼び起す。恐らく諸君は同じ様なことを毎日やつて居ることと思ふ。而して自分の職責を正しく眞剣に果して行く間に自分を育て自分を導いて行くものだ。

家族的協力

そこでどうかしてこの同盟に共に働かす將來同盟を荷ふべき青年諸君の日常、又諸君の希望をよく社の首脳部に反映し、一方首脳部の考へ方を諸君の一人一人に徹底させる仕組を作り上げ度いと云ふところから今回この青年團の組織を思ひ立つた譯である。本社には二百七八十人の團員があるが、先づ十名を單位とする班を組織し、それ々の分野に於て諸君の間から責任者、即ち班長を出し、そしてこの班長が以上申し上げた様に私の考へ方をよく體し、又其意志を一人々々に漏れなく徹底せしめ一團となつて大同結盟の精神に基き、其の働かす場所がどこであらうとも又如何なる時艱に遭遇するとも一人々々が大同盟の家族の一員であるといふ自覺に徹底して其各々の任務を遂行して行き度いと思ふ。

同盟青年團結團式 本社全國に魁けて舉行

三百の若人待望の本社同盟青年團は全國に魁けて六月二十二日本社に於て結團式を舉行、目度度く其發足をした。

此の日前十時古野團長を始め大平副團長、各顧問、幹事並に來賓、各部部長臨席、一同肅然と整列裡に開式、先づ皇居に向つて最禮禮、戰後將士の英靈に感謝並びに出征將士の武運長久を祈願し、國歌齊唱の後、團長立つて「青少年學徒に賜りたる勸語」を捧讀、終つて別項の如き訓話あり、我等一同今更乍らその責任の愈々重大なるを肝銘す。次いで青年團代表左

の宣誓を行ふ。

我等は報道報國大同結盟の精神に則り本團員としての本分を盡し以て社業の發展に寄與せんことを誓ふ

役員の挨拶に次いで來賓の島山常務理事、松本編輯局長、塚本編輯局長相次いで登壇し、青少年の將來に對する重大責任を強調し、更に陸軍報道部長馬淵大佐が團長の紹介にて世界の現狀と青少年の覺悟につき有益なる訓話を行ひ一、同深く責任の重大さを痛感して一時四十五分式を閉つ。出席團員百九十八名。

職員會の 役員決る

同盟内の翼賛機關として同盟職員會並に青年團は去る六月一日本社を初め各地支社局に於てそれぞれ設立され、これにより愈々名實共に大同結盟の體制へと推進するわけである。職員會の協議員並に班長は各推薦區毎に互選の結果左の如く決定した。

| 氏名 | 職務 |
|-------|-----|
| 進藤陽吉郎 | 經理部 |
| 宮村秀雄 | 庶務部 |
| 會田國子 | 經理部 |
| 板谷幸太郎 | 業務部 |
| 綾野政治 | 文書部 |
| 永由君人 | 整理部 |
| 瀧谷賢 | 政經部 |

| | |
|-------|------|
| 神坂鶴太 | 政經部 |
| 森元治郎 | 政經部 |
| 塚原俊郎 | 社會部 |
| 高尾辰馬 | 社會部 |
| 大屋久壽雄 | 社會部 |
| 小田善一 | 社會部 |
| 田中武徳 | 社會部 |
| 堀川武夫 | 社會部 |
| 畑井勇 | 社會部 |
| 畑井清光 | 編輯庶務 |
| 大塚嘉次 | 整理部 |
| 小座間茂 | 査閲部 |
| 高村利世 | タイブ |
| 本田正三 | タイブ |
| 加藤とめ | タイブ |
| 石井博 | タイブ |
| 仲村喜一 | 東亞部 |
| 武田尙昌 | 體育部 |
| 小澤徹郎 | 寫眞部 |
| 知久義雄 | 寫眞部 |
| 高木凱人 | 寫眞部 |

獨ソ開戦の一瞬

火事場以上の外信部

日曜の編輯局の空氣は何となくなごやかなものだ。外信部のデスクも正午過ぎ朝の入電を仕末して一同四人揃つて蕎麥で腹を作つて一服と云ふところ、中電分室から「ニューヨークから至急報」と云ふ電話、前後來廿二日頃が危ぶないぞと云ふので多少警戒はしてゐたが、まさかと思つてゐた矢先きだ。それとばかり一人が原稿用紙に「ニューヨーク廿二日同盟至急報」と書いて待つ、一人は氣送管の處に横飛びに飛んで今や遅しと待機の姿勢をとる。来た!! ロンドン發のニューヨーク電だ、「ヒットラー總統は獨軍にロシヤ進撃を命じた」と云ふのだ。「初めたぞ」と思はず怒鳴る。静かな日曜

| | |
|--------|------|
| 林十水而樂生 | 寫眞部 |
| 加藤太一 | 地方部 |
| 高野太一 | 地方部 |
| 上野賢二 | 地方部 |
| 藤崎辰也 | 地方部 |
| 前島まき | 地方部 |
| 石澤千松 | 大陸部 |
| 三浦良知 | 大陸部 |
| 大倉旭 | 海外部 |
| 林裕次 | 技術部 |
| 細波孝 | 技術部 |
| 江藤武臣 | 技術部 |
| 小原光志 | 發送部 |
| 菅井一之助 | 發送部 |
| 西谷彌兵衛 | 調査部 |
| 三枝治市郎 | 商通出版 |
| 齋藤文彦 | 調査部 |
| 千葉秀雄 | 情報部 |
| 西村二郎 | 情報部 |
| 佐久間克己 | 特信部 |
| 松本兼吉 | 業務部 |
| 永松泰次郎 | 内經部 |
| 諏訪移治 | 内經部 |
| 高木慶司 | 内經部 |
| 永峯正樹 | 外經部 |
| 小寺巖 | 外經部 |
| 中新凡夫 | 外經部 |
| 高橋與三治 | 以上本社 |
| 氏名 | 社局 |
| 岩崎七郎 | 青森支局 |
| 齋藤榮 | 秋田支局 |
| 龜井進一 | 仙臺支局 |
| 村瀬諭吉 | 桐生支局 |
| 五十嵐哲雄 | 足利支局 |
| 蒔田金造 | 横濱支局 |
| 新藤米子 | 新潟支局 |
| 浦野松男 | 甲府支局 |
| 末木一郎 | 長野支局 |
| 青木富雄 | 長野支局 |
| 今井幹泰 | 岡谷支局 |
| 松本支局 | 以下次號 |

がらぬのが氣になる。間もなくフィンランド、ルーマニア軍が失地回復のため、軍事行動を起したと云ふ入電があり、更にベルリン時間四時五十分發電で「ゲッペルスは廿二日午前五時に重大發表をする」と云ふ警戒電が入つた。これで愈々確實だ。その後續々、形勢重大を暗示する電報が入るが、嚴重な統制が布かれてゐると見えて五時にならないので宣戰布告の電報は入らない。この間にもニューヨーク、サンフランシスコから保護が飛び込み、経路を變へてRGAやMKYやPWを併用苦心の打電だ。デスクは忽ち電報の山が出来上がる。ボーイさん「原稿」「鉛筆」「同報」とまるで火事場以上だ。ニュースは殆ど五分置き位に出る。その内に「廿二日早曉獨ソ兩軍衝突、目下激戰中」と云ふ生々しいベルリン至急報が來る、防共協定、獨ソ不可侵條約、英獨開戦、フランスの降伏、三國同盟とどう行く處に行つたのだ。水と油の關係だつた獨ソ關係が正常化したのだ。

この頃になると號外を見たり、呼出し電話で集つて來た連中が、編輯局の入口あたりから上衣を脱ぎ、ワイシャツの腕をまくり上げながら飛込んで來る。電報と譯譯の競争だ。DNBがヒットラー總統の宣言とリッペンントロップ外相の宣言全文を打つて來る。タス通信もモロフ外務人民委員のラヂオ演説を打つて來る。ベルリン支局、モスクワ支局、ニューヨーク支局、ワシントン支局は冷靜な第三者として日本人の觀點から正確な情報を基礎に、判断、見透しを打つ。デスクでは電報をこなし乍ら、各支局に激勵電を打つてこれに答へる。それベルリンから國際電話だ!! 獨ソ關係の歴史的解説記事だ!! 十一時十五分の締切時間も何時しか過ぎて、ちや、この邊で仕事を打切つたのが午前一時五十分「獨軍レニングラードへ進撃」の外信七十八號だつた。

戰地便り

佐世保局氣付第一
遣支船隊司令部附
津田榮太郎

北支派遣原田熊部隊
若松部隊
鈴木鐵男

華府支局移轉
今般左記に移轉
1363 National Press Bldg,
14th and F Street N.W.,
Washington, D.C.
Tel: Republic 5192

地方紙の再發見

山口 巖

朝日新聞も遂に朝刊四頁夕刊二頁と建頁の變更を餘儀なくされた。朝夕刊八頁は現下の最高標準となり最大紙幅となつた。四年前迄は十六頁を生命線と叫んだ中央紙或は準中央紙を以て任ずる地方紙の現況を見る時、如何に時局の要請が嚴肅、苛烈なものであるかが判る。

用紙制限 // これは正に新聞新體制を確立せしめる非常命令だ。節米が、物資の節約が國民生活の根本的に建直はさせざる様に用紙制限 // は新聞體制について最も酷烈、嚴正な無言至大の批判であり、再建命令である。即ち自由主義的經營、編輯の餘喘を保ちつつあつた多くの新聞は、今や國家の要請に應へて明確なる指導的國家的性格を顯現せねばならなくなつたのである。

斯くて全國新聞は新しき時代に向つて一齊に、歩調を揃へて、再出發せしめられた。即ち用紙制限 // が全國各紙を驅つて好むと好まざるに拘はらず國家的軌道に乗せて了つたのである。國策列車は既に出發し世界新秩序建設の大理想に向つて進んでゐるのだ。私はこの新聞新體制に當り更めて地方紙の存在理由を一考して見度い。

山高きを以て貴しとせず樹あるを以て貴しとなすと云ふはなかく味のあつた言葉と思ふが新聞も紙幅多きのみを以て決して貴しとなし偉大となすことは出来ぬ。こ

れが誇れたのは過去の話で結局は内容であるが戦時下の今日に於ては明確に國家の意志を國民に讀者に傳達徹底せしめる用意あるものでなくては有害無益である。限られた紙上に盛られるものは國家最高の戦力を發揮するために協力し、寄與するものでなくては存在價值無しである。用紙制限 // はニユースについて痛烈な無言の批判をしてゐるのだ。我々の取扱ひ得るニユース、紙上に發表し得るニユースの性格を規制して居るのだ。即ち國家總力戦を完からしむるために、戦力の強化をなし得るものが我等の紙上に取扱ひ得るニユースであり、之に反し些かにも戦力の阻害をなすものは取扱ひ得ざるものと規制して居るのだ。この絶對的觀點に立つて紙面の檢討を行ふ時、我れ // は所謂八頁建に於ては決して不十分なりとは斷じ得ない。そのみか更に反省し、再考すべきもの多々あるをさへ隨時、隨所に發見する。ここに今後の研究課題は尙ほ嚴存する

地方紙は飽く迄も地方紙である。その存在する宿命的的地域性を没却しては、極論すると地方紙は結局自滅である。

全國各地方紙の分布状況を見ると、筆者の寡聞を以てしても、地方紙はその存在する當該縣内にその發行部數の大部分を配布しつゝあることが推知される。この事實は眞に重要な現象であつて地方紙がその存在する地域性を忘却して

は結局存在の價値を失する事が疑はれるのである。然るに同盟の擴充強化、通信機關の發達、通信技術の向上、輸送連絡機關の發展は最も簡便に所謂中央紙の模倣と中央紙的偽裝を可能ならしめ、その結果は徒に中央紙の進撃を容易ならしめる地馴し工作をなして來た。地方紙がその母體である大地から足を浮き上らせては、かなき自己満足をなすし、ある間に中央紙はその近代的裝備と自由主義的技術を以て着々地方席捲を完成しつゝあつたのだ。

然しながら時局は中央紙が從來誇つた紙幅を一瞬にして地方紙と同等に引き下げその優越性を奪つた。中央ニユース、國際ニユースについては、中央、地方共に同一基準に立ち時間的、距離的差別は既に遠き昔語りと消えた。今こそ地方紙はその形式に於て、中央紙と肩を並べ得ることとなつたのだ。

だがその設備に於て、機構に於て、陣容に於ては到底これと比肩し、更にこれを克服するが如きは至難に近き困難である。中央ニユースに於て國際ニユースに於て中央紙は何處迄行つても同盟プラスの中央紙であり、地方紙は唯だ同盟のみである。然しこれは地方紙の價値を何等減殺し卑下せしめる條件では斷じて無いのみか地方紙にとつては、同盟のみで充分である。これは我々が同盟に在籍し我田引水的水的自惚を示すものではなくて、内外重要ニユースの發表が國家の意志發動に依つてのみ可能である今日に於ては中央部と最も緊密なる連絡を持つ同盟のみに依存することが最も安全であり、且つ充分だからである。

地方紙としては特に地方應存在 (四頁へ續く)

△海の家開場

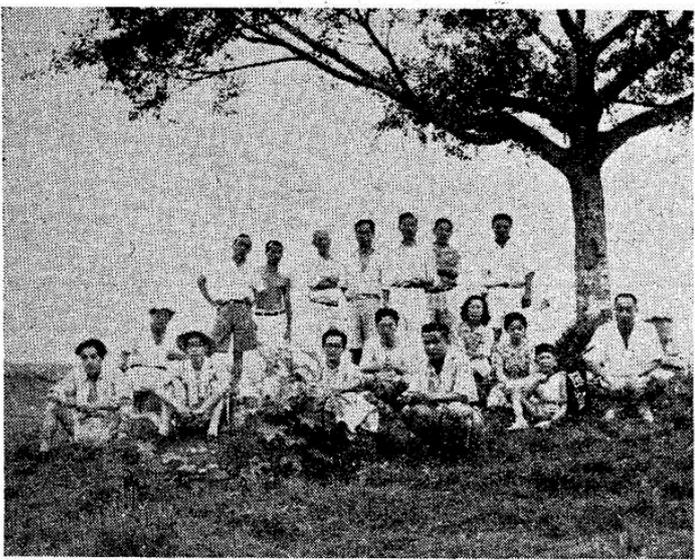
昨年好評を得ました社員及家族の休養、體位向上を目的とする逗子同盟海の家は今夏も開設して居ります。

海岸迄徒歩五分、水泳に、釣に便利ですし家も静かな環境にめぐまれ休息にも適して居ります。休日、休暇を利用して御出掛け下さい。御利用の方は庶務部へ申込み副

耐熱ハイキング

廣東總局

六月十五日廣東同盟始つて以來夫人の紅二點を添へ、それに總局の耐熱ハイキングを行つた。總局長令息迄参加して、南支同盟軍の長以下總勢十五人。横田、市川兩精銳が新館前に勢揃ひ後勇躍東方



連一カイハ局總東廣

- 食サービス券を受取つて下さい。但し米の配給がありませんから各自飯米を御持参願ひます。
- 一、場所 神奈川県逗子町櫻山二、三七七 (驛より徒歩二十分、バスの便もある)
- 一、時期 七月一日―八月三十一日
- 一、庶務部へ申込みの方に限り宿泊が出来ます。
- 一、職員は谷津バンガローを御利用下さい。

に向つて出發したのが午前九時四十分。猛獸狩をつくりの總局長、市川兩御大、老艦を厭はず一行に参加した平井老、コンパスの長いのが御自慢の松尾部長、ビール樽をつくりの徳さん。下駄履きの柳田坊や等々連、警戒嚴な歩哨線に來る度に兵隊さんが胡敢臭さそうなる目で睨む。リーダー格の伊藤(菊)南洋廳長が「御苦勞さんです」と一々腰を低くして歩くので一行は至極簡単に歩哨線突破が漸く町外れの並木道を左に折れてたらしくと曲つて行くとき我社の東山送信所に到着した。

一キロ新設の偉力や、室内設備を參觀の後第二コースに入る。燒きつく様な直射だが御上品な奥様連も無鐵砲な健脚連に伍して行くのは感心だ。たら／＼坂の緩勾配を二百米も登りつめた時分から羊城八景一、廣州の鎮山と稱せられる千二百尺の白雲山が左手に見えるはじめ、目的地七十二烈士の墓が近づいたのを知り勇氣百倍。

泥田に水牛が行水してゐるのに驚かされたり小丘で看護兵の猛訓練を傍觀しつゝ、「貽我抱恨」の姑娘墓石の墓地の間を縫ひながら歩き續けること二時間と五分にして有名な辛亥革命に殉難した烈士七十二人が葬られてある黄花崗に來た。豫め打合せて置いた炊事班が先廻りをし豚汁の用意をして待つてゐる。黄花崗を一巡、小丘で黃興等革命黨員の決死の奮戦も效なく總督張鳴岐を撃ち損じた慘事を彷彿たらしめる總局長の長講一席あり。次いで手料理の團樂豚汁會が催された。

體腹詰め込んで歸還コースにいたのが午後一時二十分。かくして踏破距離實に二十三軒、午後四時一人の落伍者もなく無事歸着した。

人事 (六月)

海外へ
 小松利一 (編輯) 漢口支局長へ
 吉田哲二郎 (編輯) シドニー支局長へ
 堀尾喜安 (中支) 角田文雄 (通信) 山田吉徳 (通信) ハノイへ
 小關順平 (編輯) 水谷啓二 (編輯) 浦上弘雄 (經濟) 松原冬彦 (大阪) 中支總局臨時在勤
 德永丈助 (經濟) 北支へ
 藤原文雄 (編輯) マニラへ
 依岡健一郎 (編輯) 盤谷へ
 川井弘彦 (編輯) 數馬房夫 (通信) 南支へ
 西原吉郎 北支へ
 海外より
 坂田寛藏 (漢口) 編輯局東亞部次長へ
 倉田正一 (シドニー) 佐藤剛 (香港) 井關實 (中支) 吉田茂 (南支) 通信へ
 國內
 岩本清 (編輯局外信部長兼情報部長) 通信局參事兼調査局情報部長へ
 萩原忠三 (總務) 編輯局外信部長へ

板垣武男 (編輯局政經部次長) 經濟局內經部次長兼經濟局政經部次長へ
 豐島清光 (編輯) 編輯局編輯庶務主任へ
 寺尾順祐 (京都) 堀尾壽春 (神戸) 中島基行 (京都) 末木一郎 (甲府) 大阪へ
 甲府へ
 星野又三 (通信) 芳賀勇 (同) 竹内忠 (大阪) 菊地優夫 (編輯) 小川清 (通信) 高橋清 (同) 鳥井悦二 (調査) 井原金吾 (福岡) 菅原吾 (名古屋) 三戸光 (札幌) 佐々末省吾 (秋田) 高橋恒三郎 (長野) 窪田袈裟重輝 (臺北) 西野時枝 (經濟) 丹野隆 (大阪) 石井榮子 (同) 赤羽俊雄 (同) 赤島智恵子 (横濱) 渡邊一子 (名古屋) 山城千恵子 (長崎) 金相化 (釜山) 準社員トス
 新入社員
 山田吉徳 (ハノイ) 武内八重子 (通信) 沈萬年 (臺南) 鈴木昭二 (大阪) 篠原菊夫 (鹿兒島) 長尾義男 (京都) 松尾登美子 (總務)

笠原義榮 (經濟) 今井てい (同) 西原吉郎 (北支) 橋口鐵夫 (大阪) 周原光郁 (清津) 菊池愛子 (編輯) 松澤喜代子 (同) 椎橋愛子 (同) 橋場儀作 (同) 渡邊ハナヨ (總務) 退社
 大森實 (下關) 辻内綾子 (總務) 山下悦子 (關門) 田中勉 (府甲) 井上俊一 (名古屋) 澤上美子 (京都) 大脇富美子 (同) 其 他
 北澤正也 (經濟) 吉澤正也改姓 死亡
 任 鍵 彬 (京城) 互助會報告 (五月)
 結婚
 中島覺男 (福岡) 橋本將親 (關門) 清水國彦 (名古屋) 原尾友誠 (同) 松尾友文 (青森) 萱島久子 (査閱) 入 營
 阿部正文 (青島) 出生
 一色茂平 (岡山) 第二子 酒井晴雄 (高知) 長女 萩原榮治 (小樽) 二男 一條重一 (調査) 長男 高村利世 (査閱) 三子 田中眞清 (札幌) 男 子 見 舞 足立敏夫 (經濟) 病第二回

宮城清 (同) 病第二回 荒井善次郎 (編輯) 病 堀谷文子 (同) 病第二回 内田貞雄 (同) 病第三回 松本彌 (同) 病第二回 田中盛文 (通信) 病第二回 岸芳一 (大阪) 夫人 病 伯井芳 (大阪) 病 浦上冬彦 (大阪) 病 山路吉左衛門 (同) 病 村岸正雄 (經濟) 夫人 病 木村勇雄 (編輯) 病 坂井金二 (同) 病 荻田定雄 (大阪) 病 加藤正一 (廣島) 長男 穗谷四郎 (廣島) 長女 石井文治 (編輯) 長男 水落茂 (經濟) 長男 金井義元 (大阪) 夫人 病 松井善四郎 (編輯) 病 三増正穂 (鹿兒島) 病 相賀トミ (外經) 病 原 靜子 (名古屋) 病 西村 潛 (福岡) 長男 病 宮川節夫 (高知) 次女 病 中村仲康 (整理) 次女 病 任 鍵彬 (京城) 病 弔 慰
 藤原文雄 (編輯) 夫人死亡 坂田二郎 (同) 母堂死亡 江原順一 (清津) 長女死亡 退 社
 小島昌 (經濟) 相良佐 (通信) 折橋慶治 (總務) 木村幸一 (京城) 辻内綾子 (總務)

一縣一紙の主張も恐らくは——或は無意識裡に——この同時支配の國家的主張を達成せんとする意圖を多分に藏するものと断しても決して過言ではあるまい。
 地方紙の中央ニュースに對する地方的使命はこの同時支配の達成に在ると見るが、これだけでは地方紙の確然たる存在理由とはならぬ。地方紙がその存在を主張し得る根原は、その存在する地域性に於ける運命的優越性である。この地方紙のみが持つ絶對的優位は地方紙創立の當初から附隨するものであつて、この運命的偉大さを自覚せず、これを徒に放擲、等閑視して、何處に地方紙の存在があるのだ。
 實に今こそ地方紙はその本来の面目に立ち還つて自らの本然の相を明確に把握してその特殊的地域性を確保し、独自の境地を開くべき最後の機會ではあるまいか。地方紙がその經營に於て、その編輯に於て限られた少數特定者の犧牲、努力に依存する自由主義的方式を清算しその地域の總意、總力を受けて立つの心構へを以て新しき組織、新しき機構を確立しその地域、國民を對象として、その特殊の政治、産業、文化の開展に協力しこれを指導するに於ては國家の總力は加速度的に擴充、強化されることは眞に明瞭である。

この運命的優越的地域性に立脚して地方紙が独自の開展をなすためには、地域ニュース、即ちローカル・ニュースについて特に深甚の考慮と研究とを集中せねばならぬ。その取材記者を、編輯者を、縣内支局員を、更に通信員を、その分擔、その地域の指導的地位に値する人材を以て揃へることに先づ腐心せねばならぬ。これを從來の如き特定者の經營下に於て選任することは至難であるが、地域の總意總力を受けて立つとすれば案外の容易さを以て實現可能であらう。
 從來地方紙に羅列され徒に白き紙面を黒くして来た態のローカル・ニュースでは地方独自の發展と擴充をなすには如何に時を藉しても期待すべきものはない。ローカル・ニュース不振の主因は地方紙の性格についての認識に缺く處があつたのみならず、ニュース取扱者に適材なかりしことも見逃し難い處である。新聞は一二好事家の道樂仕事ではなく、記事は一二道樂記者の所産であつてはならぬ。郷土の傳統と特殊性とを尊重し地方地方の特質を最大限に發揮しつゝ常に國家全體として新に創造發展することを目標として地方的總進軍をなすためには、最も重要な指導的役割をなすものは地方紙である。或は從來の個人主義的文化を止揚し地方農村の特徵たる社會的集團關係の緊密性を益々維持増進せしめ郷土愛と公共精神とを高揚しつゝ集團主義文化の發揚を計り以て我が家族國家の基礎單位たる地域的生活協同體を確立することも地方紙に負はされた重要責務の一であつて、地方紙の使命は時局緊迫と共に益々重大を加へるのみである。